企業が企業努力におけるゴールを有することへの真実

黒田インターナショナルコンサルティング
黒田　毅

過去数十年にわたる企業努力は企業のゴールを有すると考える。これは企業が独立体として、その完成という目標を有することへの私見である。

現在テスラの先端工場とシステムへの到達は、企業経営システムとグローバル市場における自己製品サービスの固定販売と世界における販売システムの構築と環境において、企業が自己の利益性と経営環境において安定化を有するという、完成を有するものと考える。

これらは企業システムが完成へ到達することなのである。

これらは日本企業が政治の怠慢に対して常に企業努力においてこれらを解決したこととともに、企業が世界に対して対等な自己を有するという、現実を提案するものである。

他方において創造性という新たな可能性を企業が有することを与えるのである。これらは企業改革が GAFAM などとの対等性を可能とできることを証明する。規模でなくても、内実において企業価値を有することがそれを可能とできるのである。

新しいキーワードは、企業の創造性という新しい現実なのである。アメリカにおけるこれら新しい創造性は新たな未来を模索しているのである。

そのため企業は必ずこの理解を要求され、企業改革を新たに提案するものである。これらは現実変化を明確に理解し企業がそれに参加する必要があるのである。

これらは時代変化への参加という新しい企業要求が存在するのである。これは現実が過去３０年において革命的変化を行ったことは起業家においてそのすべての存在が必ず理解できることから正しいのである。

時代を牽引することは、その独自性と企業理念を求める。GAFAM は明らかにこれである。これら企業の挑戦は企業の完成を模索しているのである。そしてそれは企業の利益の安定化などにおいて存在するのである。